

い).

兵庫県下で記録された甲虫 3,311 種のうち、多くの種を産する科ベスト・ファイブは、1.オサムシ科 308 種、2.ハネカクシ科 300 種、3.カミキリムシ科 297 種、4.ハムシ科 296 種、5.ゾウムシ科 270 種である。

おそらく調査が進めば、ハネカクシ科が一番多くの種を産するであろうと考えられる。

以上、兵庫県にどれくらいの甲虫が分布しているのかといったことを現時点で眺めてみたが、まだまだ調査は前途遠遠であり兵庫県甲虫誌のまとめが出来るのは何時のことか大変心許ない次第である。

<参考文献>

- 平野幸彦(1987) 県別の甲虫は何種いるか
月刊むし(201),p.28-31.
平野幸彦(1995) 地域別の甲虫は何種いるか
月刊むし(296),p.23-27.
平野幸彦(1998) 地域甲虫相を調べる
昆虫と自然 33(11),p.17-20.
平野幸彦(1998) 平野幸彦氏虫寿記念号
神奈川虫報特別号 No.2.

(TAKAHASHI TOSHIO 神戸市兵庫区氷室町 1-44)

私の昆虫採集記(1)*

高橋 寿郎

私が昆虫採集を始めたのは昭和 10(1935)年である。考えてみると年数だけではもう 60 年を超えている。その間、学徒出陣で中支戦線に参戦、シベリア抑留のブランク時代、戦後を生きていくための"虫どころではない"といった生活、また会社社会における生活のための戦いと、プロではないので虫取りが十分に出来る生活ではなかった(定年退職後は虫取りは時間的には出来たが、今度は生活のため金銭的に大変苦しかった)。いろいろと制約はあったが最近まで昆虫採集をやっていた。

そこで、私の昆虫採集の記録のいくつかをここに発表しておきたいと思った。読み物として、また唐人の戯事(ワグト)として読み流していただければ幸いである。

初めに記したように私が昆虫採集を始めたのが昭和 10(1935)年である。その年、私は神戸二中(現兵庫高校)に入学した。当時中学校では夏休みの宿題に昆虫採集は必修科目であった。

裏山へ出掛けては生まれて初めての本格的(?)昆虫採集を始めた(もっとも子供の頃、当時はアオカナブンとかカナブン、ミヤマクワガタ、ノコギリクワガタ、カブトムシが子供の遊び相手としてわりと身近に簡単に入手出来ていたりして、虫取りの機会

に恵まれていた時代であった)。

標本製作については良く知られている*加藤正世博士(*印故人、以下同じ)著の"趣味の昆虫採集"並びに"昆虫標本整理法"を本屋で立ち読みして承知した(購入するほどの小遣いが無い状態だった)。特に珍しいものはとれていないのであるが、標本箱二箱をこしらえて9月に学校に提出した。あにはからんや先生からはこれは良く出来ている、百貨店の展覧会に出品するから虫の名前をキッチリとラベルに書き込んでこいといわれてさあ大変、虫の名前なんか当時正式にはほとんど知らなかったので、仕方なく学友と(彼も展覧会出品組だった)大倉山にある神戸市立図書館へ出掛けた。

昆虫図鑑(松村松年博士のものであった)を借り出して、閲覧室で標本と較べて名前のわかるものはラベルに記入して、全部がわかったのではないが程度わかった段階で学校へ再提出した。この調べは丸一日かかった。2人とも飯も食わずに図鑑をくり返して見た。おかげで一日で音を上げてしまった。

当時、9月には神戸市内の中学校の宿題作品を集めて、神戸大丸で作品展をしていた。生まれて初めての採集品を出品して貰って、その上思いもかけず入賞までして、カブトムシの図柄のついた銅メダルを貰って感激した次第である。

その年の秋、湿性肋膜炎になり、翌一年休学し転

* 兵庫県甲虫相資料 357

地療養することになり、祖母のいる広島県深安郡神辺町に行った。そこで、浪人中の叔父と魚釣りに明け暮れるうちに、蝶が多く飛ぶのに惹かれて2人して蝶採集に熱中した。福山市内の本屋で山川 繁著の「原色蝶類図」を見出して、それを見て採集した蝶の名前を探した。買う金が無いので何とか口実を見つけては福山の街まで出かけて立ち読みを重ねた。

広島では東城町帝釈峡でカラスアゲハの群飛に会い、スミナガシの採集に感激し、総領町田総にて叔父の造り酒屋の酒桶にオオムラサキが飛び込んできたのを採集したり、神辺町では6種ほどのヒョウモン類の数の多さに驚いたものである(広島県での蝶類採集記録は「広島県蝶採集録」として昆虫世界 Vol. 43, No. 507, p. 15-19, 1939 に発表している)。ようやく昆虫採集が面白くなってきた。

同級生に今津隆男・福永安郎君がいた。今津隆男君はゼフィルスに熱を上げて、学校を休んでは京都・滋賀あたりまでゼフィルス採集に行っていた(美しいゼフィルス採集品は同君の須磨のお宅で見せて貰い感激した)。

当時昆虫趣味の会神戸支部が出来たのを機に、支部長*関 公一氏、幹事*米谷正司氏宅に伺い、入会させて貰って昆虫採集、研究にのめり込んでいった。米谷正司氏宅では Arrow の Fauna British India:

Lamellicornia: Cetoniina & Dynastinae とか Breuning の Monographie der Gattung Carabus を見せて貰ったり、丁度昆虫界に投稿準備中の「リュウキュウハナムグリ属に就いて」の付図の書き方を教わったりした。また、同氏所有の「新島善直・木下栄次郎著、こがねむし二関スル研究報告(第二) 我国二産スルこがねむし及其分布(北海道帝国大学農学部演習林研究報告第2巻第2号, 1923)」がどうしても読みたくて、無理を云ってお借りして大学ノートにペンで全文(260p.)を複写した。現在のようにコピーが簡単に出来る時代ではなかったので、文献のコピーは皆ペンで筆写したものである。お陰でよく読むことも出来たわけである。この複写本は、その後製本して現在も所有している。

神戸二中時代には博物研究会とか神戸博物同好会をこしらえて会誌に昆虫記事を多く発表していたし、当時兵庫県博物学会々誌には二中の竹中 茂先生(博物)のお世話で投稿発表して貰った。また、昆虫趣味の会機関誌「昆虫界」にも数篇の報文を発表した。中には「昆虫と映画(1)(2)」(昆虫界 Vol. 10, No. 102, p. 535-536, 1942, Vol. 11, No. 108, p. 68-73, 1943)とか、「文化

映画に現れた昆虫」(昆虫界 Vol. 10, No. 99, p. 317-320, 1942)のような怪文章的なものまで発表していた。

当時昆虫採集の関西・中国地方のメッカとして知られていた「伯耆大山」へも単独で採集に行った(大山の宿では大阪の福貴正三氏と一緒にになり、いろいろとお世話になった)。頂上近くにカメノコテントウが多く飛来するのに遭遇し、その美しさに驚いた記憶がある。当時大山に採集に行かずに昆虫採集を云々することなかれといわれていた時代であった(この大山採集行は「虫の世界, Vol. 5/6, p. 91-94, 1939」に発表して貰っている)。

第一次学徒出陣ということで、卒業を半年繰上げ、高等商業学校(旧制高商)3年生の9月に卒業、11月に本籍地(広島県)のある広島市白島の西部第七部隊(工兵隊)に現役兵として入隊、入隊後直ちに中支派遣隊 6869 部隊に転属を命ぜられ、2週間たって宇品港より御用船に乗船、途中アメリカの潜水艦に追いかけれ、朝鮮の済州島に避難に一幕があり、中国大陆に向かった。揚子江(長江)に入り、そこから九江で休息上陸があった後、当時の漢口(現武漢)に上陸した。

私は工兵隊であったので、師団司令部(宜昌)のそば、当陽県河溶鎮に駐屯した(学徒出陣のお陰で幹部隊-幹部候補生隊に所属した)。

見渡す限りの平坦地で山とか樹木がほとんどない川に沿った地であったが、訓練の間には野外に出て蝶を観察したり兵隊と一緒に蝶を追いかけたりした。印象に残っているのはホソオチョウの悠然と飛ぶ光景であった。ホタルもシーズンには数多く見ることが出来た。衛兵当番で夜間巡察するときなどによく出会った。

ここでの蝶観察記は、原稿を軍事郵便葉書に書いて送って、昆虫世界(Vol. 48, No. 567, p. 136-138, 1944, Vol. 49, No. 569, p. 35-36, 1945, Vol. 49, No. 570, p. 53-54, 1945)に3回にわたり「中支虫便り」として発表して貰った。

中国大陆での虫の思い出としては、架橋作戦に出ているとき川端の樹木の根元からタイワンカブリモドキによく似たカブリモドキ(エリスカブリモドキ?)がバラバラと6頭ほど出て来た時は驚いた。黄河を渡った新郷(シシヤ)の街はずれで、あの有名なフェアブルの昆虫記のトップを飾る玉転がし蕨虫に出会った時は感激であった。このあたり、この蕨虫は多く見られた。そして蕨を転がしている姿がそこそこに見られた。かなり大きな蕨虫であると同時に

にその糞を転がすスピードの速さに驚いた(勿論、ファーブルの昆虫記に出てくる糞虫とは種類が違っていた)。

シベリア(厳密に云えばカザック共和国～現在は独立国～ウスチカールメンゴスクの収容所)で終戦後2年間抑留生活を送った。シベリアではないが冬季零下35度ぐらいまで気温は下がった。10月から4月中まで雪が降る地であった)。ここで印象に残ったのは、煉瓦工場に働きに出かけたとき、工場の側溝に毎朝かなりの個体数の数種のオサムシ類に出会った。日本のものと違ってなかなか美しい色をしていた。見渡す限り広大なコルホーズのジャガイモ畑にオオニジュウヤホシテントウの大群がいた。ナホトカの帰国船の乗船場に無数に飛ぶカメノコテントウの大群に出会ったことは忘れられない光景であった。収容所内では毎夜、南京虫とシラミに悩まされた。

養父郡 氷の山

復員し会社勤めになってから兵庫県の甲虫相を調べてやろうと考えたが、なかなか会社勤めで休日が取れない。年休など取ったことがないし、日曜出勤もあたりまえの時代であった。会社が鉄鋼問屋であった関係から丁度朝鮮戦争が始まってからは鉄は時代の花形になってしまった。復興と戦争、鉄は国家なりと鼻息は荒く酷使された。それでも、7～8月にかけて3日間だけ交替での夏休みが貰えた。それを私は養父郡氷の山甲虫相調査に用いた。

氷の山、海拔1,510.1m、但馬と因幡の国境にそびえ、高さは県内第一、中国山脈では伯耆大山について第二の高峰。「須賀ノ山」と呼ぶのが正しく氷の山の名は因幡への国境を越える「氷の山越え」といったのから起こった名前とのこと。

戦前氷の山での昆虫採集の記録はほとんどなく、僅かに*関 公一氏が「兵庫県の天牛科目録」(昆虫界 Vol.9, No.89:447-456, 1941)の中で「某地、北部山地」と産地を書いて記録したカミキリムシ(ルリボシカミキリ、フタオビミドリカミキリ、アサカミキリなど)の産地が氷の山であったとのことだった(関 公一氏から直接お聞きした)、またルイスクビナガハムシが*岩本新一氏によって1940年に記録されている(昆虫研究, Vol.4, No.1/2, p.22, 1940)。したがって、ごく僅かの採集調査者が訪れていたことになると思われる。*大倉正文氏も戦前鳥取県側から氷の山に

登られて、途中アサカミキリを多数採集したといった話をお聞きした。どちらにしても氷の山での昆虫採集は戦前ではごく僅かであったようである。

1952年8月、兵庫県生物学会の主催で*岩田久二雄、奥谷慎一、永富 昭、中根猛彦博士等の指導で氷の山の採集会が催され、その結果を発表(兵庫生物 Vol.2, No.2:121-125, 1953)、氷の山が好採集地であることが知られたことから、氷の山への注目が集まった時期であり私がこの山を調べてやろうと思いついた理由でもある。

私は氷の山へ1953～1959年の間に大体毎年7、8月に6回採集に出掛けたが、ほとんど単独行動であった。ただ、2回目の時は阪神大震災で亡くなった*石田 裕氏(オサムシ、ガガンボの研究家)と一緒にいった。当時は今と違って車の普及が無く、交通機関としてはバス利用しかなかった。国鉄(JR)、山陰線八鹿駅から出る熊次行きバスに乗って行き、終点丹戸、福定、大久保であった。私は福定にある西村英夫氏宅(民宿)に6回ともお世話になった。私の行った時は全く他に泊まれる方もなく、淋しい宿泊であった。民宿の電灯にムネホシシロカミキリが飛来して喜んだ記憶は忘れられない。アサカミキリは大久保の部落で数回採集した(このカミキリは麻の栽培が禁止されたので姿を消してしまった。私は雪彦山麓で飛翔中のものを採集したことがある—14.VIII.1957)。

当時蝶の山本広一氏、吉阪道雄氏等が氷の山の蝶を調べて兵庫生物に発表された(Vol.3, No.1/2, p.22-26, 27-29, Vol.3, No.3, p.124-125, 1956)。山本義丸氏は寝袋を持って地蔵堂にて夜間採集などをやっておられたとのこと。その後教鞭をとっておられた柏原高校の生徒諸君の協力を得て氷の山のファウナ(蛾を主体に)解明につとめられた。

西村 登博士は水棲昆虫調査に行っておられた。この時代、熱心な方々による氷の山の調査は華やかなものがあった。

氷の山の印象は、ルリボシカミキリに出会えることが大変うれしかった。その数は多くないが、行く度に会ってその美しさにウットリしたものである。

登山道側の溪流側方にある柳の樹に早朝何百頭と思われるほど多くのアカアシクワガタが来ているのに出会った時は驚きであった。交尾しているものもいてとにかく入れ物が無くてあまり採集出来ずに残念であった。道端に積んである薪に多数のカミキリムシ(特にミドリカミキリなど全く無数にいた)、ヒ

ゲナガゾウムシ類に出会える楽しみ、花に来ているカミキリムシ、ハナムグリ類の数の多さにただただ別天地にいる光景であった。採集は氷の山越えあたりまでが特に面白いようであったが、頂上あたりに吹き上げられてくるものがいたり、ルイスクビナガハムシが多く吹き上げられたのを辻啓介氏は見せて下さった。

氷の山の甲虫相について私は“兵庫生物”誌上に一部を発表させて頂いている(Vol.5, No.2, p.161-164, 1966)。現在の氷の山は様子がすっかり変わっているようであるが、一度行って見たいものである。

相生市三濃山

東洋大学の野正男教授が1964年5月7日、三濃山の西斜面一帯を頂上まで調べられ、ハムシ相の結果を“兵庫生物”誌上に発表になった(Vol.5, No.3, p.213-216, 1967)。僅か一日の調査で85種のハムシを採集された。これを拝見して三濃山は面白そうな山だと気がついた。時あたかも神戸生物クラブ同定会の席上、上郡に居住の方の訪問を受けて三濃山が面白いとの話を聞き、それでは調べてみようと思い組んだのが1969年5月からである。そして1976年の4月までの間、4~7月にかけて13回の調査に出掛けた。調査は全部日帰り、早朝出発、夕刻帰るといった方法で13回のうち2回は神戸昆虫同好会例会として複数人による調査を行い、それ以外は愚妻との2人による調査を実施した。

三濃山は兵庫県相生市の北端、赤穂郡、揖保郡にそれぞれ境を接し、西播磨丘陵立公園に含まれ、その登山口から分かれて瓜生羅漢として有名な地であるが、山そのものは標高僅かに509mにて一般的にはあまり知られていなかった。歴史的には非常に古い時代の伝説がある。即ち、新羅系の渡来人の集団である秦氏の一族が赤穂市近辺の海岸に早くから土着、その頭領、秦河勝が赤穂市の坂越に住んでいて、三濃山へ愛犬をつれて行き大木の下で休んでいたところが、犬が急に吠え始めた。長く吠え続けるため河勝が怒り犬の首をはねると、首は高く飛び、木の枝から河勝を呑もうとしていた大蛇の喉にかみついた。河勝は大いに悲しみ、供養のためにこの山に寺を建てたというのである(兵庫探検・歴史風土編, 31, 1979年5月7日号 神戸新聞)。

この山は瓜生羅漢に行く道の反対側、左側に入っ

れる道を進む。初めの頃はそうでもなかったが、暫くすると車の乗り入れ回数が増えて大変歩き難くなってきた。約3キロを経て谷が二つに分かれて右へたどる。ここから急坂を2キロで三濃山の部落に着く。山頂近い山陰や谷間に十軒ばかりの民家があるが、私の行った頃は山を去って空き家になっていた。頂上には納経丘という、昔経巻を埋めた跡があり、山上には求福寺がある。この部落付近には竹藪があり、シーズンに行くと筍がわりととれた。

植物相はそれ程悪いとは思われなかったが、調査の時期的な問題があったのかもしれないが、大型甲虫との出会いが大変少なかった。5月頃は道を横切るヤコンオサムシ、マヤサンオサムシ、オオオサムシ、マイマイカブリに出会った。時にクロカタビロオサムシが道を横切るのに出会った。

溪流にはカジカの声が聞こえ、ホタルも見られた。道端にある花にはハムシ、コガネムシ、カミキリなど普通種が主体であるが、結構多く来ていた。ここでは、アオマダラタマムシ、ルイスヒラタチビタマムシのように美しい種を得た。アカヘリテントウもとれた。クワガタムシではコクワガタとスジクワガタしか得られなかったが、大型のミヤマクワガタ、ノコギリクワガタも勿論いると思われる。ヒラタチャイロコガネが多くいたし、オオセンチコガネがとれた。また、カヤの葉にクロオビツツハムシが多く来ていた。ハムシ類は結構面白いものがとれる。

1974年7月6日、相生・赤穂地区は集中豪雨の被害を受けたことが新聞紙上に出ていた。早速7月20日に出掛けてみた。驚いたことに水が道路の真ん中を流れたのか道の中央部がズーッと大きくえぐられて、車が入れるかなアといった荒れようであった。この三濃山の山頂近くでゴルフ場建設予定があるとか、頂上近くでブルドーザーを見るようになった。恐らく山は様相が変わるであろう。レジャー施設に自然破壊が平然と行われている。丁度良い時期に調査が出来たと喜んでいる。今頃はどうなっているのだろうか？ 尚、この山の調査結果の概略はMDK NEWSに発表している(Vol.27, No.77, pp2-6, 1977)。

また採集の余談として“マダム奮戦記”を“きべりはむし Vol.3, No.2:15-19, 1975”に発表している。

佐用郡大撫山

大和昆虫愛好会の連絡誌に“Loomis”というのが出

ていた。その34号(1973.VI)に「近畿西部にオサを追って!!」といった記事があり、そこで佐用郡佐用町大撫山にてクロカタピロオサムシ、アキオサムシ、ヤコンオサムシ、アキタクロナガオサムシ、キュウシュウクロナガオサムシなどが多数採集出来た記事が出た(採集者名はO.T.= Osamu Tominaga, K.H.= Keitaro Harusawa となっている。富永 修、春沢圭太郎氏のことでと思われる)。アキタクロナガオサムシ181♂♀、ヤコンオサムシ96♂1♀と全く大変な数であった)。その頃私もオサムシ掘りを身近な所でわりとやっていた。

兵庫県政100年協賛出版「兵庫県観光百選」というのが手許にあった(神戸新聞社・1967年刊)。その本のp.208-209に「大撫山は佐用とその西一上月の両町にまたがり、高さは435.9mに過ぎないが、南へ約1キロの尾根が続き小さな起伏が多く変化に富む。昔は鹿庭山と呼んでいたことが「播磨風土記」に載っており、「山の四面12谷ありみな鉄を生ずるなり」と、およそ1320年前から長らくこの山で砂鉄を探っていたことが書かれている」とある。これだけの知識を得て愚妻と2人でこの大撫山なる所へオサムシ掘りに出掛けたのは1975年3月5日であった。

とにかく漠然と地図を片手に駅(佐用駅)を降り、歩いて行きはじめ見当違いの所に行ってしまうと地元の人に大撫山の場所を教えて貰って、再び山の斜面に辿り着いたのは昼頃になっていた。掘れる所があるかどうかと迷いつつ、やっと側方が掘れそうな斜面に出た。時間がない、急がねばと掘ったところ、偶然にもヒメオサらしきものが落ちた(帰宅後アキオサであるとわかった)。しめた、この付近にはいるといったことがわかり、道路の側面を掘り進んでみた。お陰でヤコンオサムシがとれたのに混じってヒメオサも落ちてきた。そこそこ採れたので、時間もだいぶ経っていることと帰る汽車の時刻も気に掛かるし、走るようにして引き返した。この大撫山(といってもかなり麓の方であるが——)に全部で1975、1976、1977、1978年と合計7回オサムシ掘りに愚妻と2人で出掛けた。

とにかく景色を見るどころではない、道路の斜面と見ればやみくもに掘って歩いた(もっとも「佐用の朝霧」として知られている光景は2、3度眼にした)。アキタクロナガオサ(ホソアオクロナガオサムシ)の多いのには驚いた。大の毒瓶5本を持って行っているのだが、すぐアキタクロナガオサで一杯になる。ヒメオサも結構場所によっては多く出てくる。一

番の感激はキュウシュウクロナガオサムシが2ヶ所ほどからかなり多く掘り当てたことだった。分布の東限の種と思われるが、大きなもので思わず喜びの声をあげたものである。

このキュウシュウクロナガオサを求めてここより西、上部の高嶺神社の裏山を、これも愚妻と2人で行き、半日近く掘って1頭だけ採集することが出来た記録もある。

富満高原あたりにも掘りに行ったことはあるが、残念ながらキュウシュウクロナガオサは掘り出すことは出来なかった。当時、大撫山ではオサムシを掘るのに適当な道路側面が多くあり、採集するには面白い場所であったが、最近はどうなっているのか、様子が変わっているのではないと思われる(神戸市近辺でもオサムシ掘りが出来る場所が次々となくなってきており、環境の変化に驚いている)。

私が神戸で初めてオサムシ掘りというのにつれて行って貰ったのが1939年1月である。

オサムシを冬掘り出して採集するといった面白さはやったものでないと思われる。寒い地方では冬はオサムシを掘る採集法は一般的には困難で、朽ち木崩しのような採集法はできると思われるが、かなりの制約を受けるのではと思われる。もっぱらトラップによる採集法になるかと思われる。しかし、掘り当てて一度に何匹ものオサムシがソロソロと転げ落ちてくる光景はやったものでないと思われる(オサムシ掘りについては拙著「オサムシ掘りをめぐりて」を見て頂きたい—遊虫千年、てんとうむし特別号、p.26-31,1995)。

加西市 畑

中国縦貫道路が福岡まで開通したのが、1974年6月はじめである。その加西市にあるサービスエリアにレストランが出来、そこに勤めている人から招待を受けたのが1974年6月17日だった。播磨平野を横断する道路であるから平野部並びに低い丘陵地帯で植相も松、杉が主体のあまり昆虫などに恵まれた地帯ではなさそうであるが、そのレストラン付近でトラハナムグリ、タカサゴシロカミキリが採集出来た。

出来たてのレストランで夜間煌々と明かりをつければ、それに向かって周辺の水田とか池に棲息している虫たちが付近の山野に棲息しているものと共に集まってくる。

これは面白そうだと云うことから愚息の車で夜間採集に6月23, 29日, 7月13, 27日と4回出かけた。

そこのレストランばかりでなく途中のレストランも調べてみた。その頃走るトラックにカブトムシが飛び込んで来て危ないといった新聞記事が出たりしていた。蛍光灯に向かって多数のゴミムシ、ゲンゴロウ、ガムシが飛来してくる。レストランの壁にはギッシリとヨツボシカミキリが飛んで来て止まっている。ミヤマクワガタ、コクワガタ、スジクワガタのクワガタムシ類、ヒゲコガネ、クリイロコガネ、クロコガネ、スジコガネ、オオスジコガネのコガネムシ類、アオスジカミキリ、ノコギリカミキリ、クロカミキリが多くやってくる。キイロカミキリモドキも多かった。日中わりとお目にかかり難いものでも、こうして見ると結構出会うことができる。このようなレストランも出来てしばらくはこの状態が続くであろうが、或る時期が過ぎれば個体数は減少してくるようである。このように、高速道路沿いにあるサービスエリアにあるレストランなど、夜間見て回ることは、いわゆる夜間採集を楽しくやれる楽しみがあるといえる。

神戸・摩耶山

江戸末期に洋学の知識が入ってくると共に、日本を訪れる欧米人も多くなり、各種の学問がこれら欧米人によって発表を始められた。

日本の昆虫学の発展もこれら欧米人によってその基礎が築かれたことは衆知のことである。

兵庫、即ち神戸も兵庫の港として古く開けたので、欧米人の来訪者の多くが兵庫に立ち寄り或いは滞在して昆虫の採集をしたりした。その関係で兵庫に関する昆虫の研究も、日本の昆虫の研究とほぼ同じくらいの時代から知られていることになる。

特に甲虫については有名な G.Lewis が第1回の日本滞在中(1867 ~ 1872)の採集品が日本の甲虫の研究の基礎となっている。

G.Lewis は兵庫(神戸)の地でも多くの甲虫の採集をしてそれを持ち帰り、自身で研究するばかりでなく、ヨーロッパの夫々専門家に研究を委ねて数多くの論文発表が行われた。即ち、兵庫の甲虫の研究の基礎も同時に始まったわけである。

その当時の兵庫、即ち神戸市内はまだ未開の地であり、現在では考えられない自然状態であったと考えられる。しかしながら、摩耶山は六甲山と違って

頂上近くに法道仙人が大化元年(645)には霊場を開き、その後150年ほど経った後、空海が唐から摩耶婦人像を持ち帰り、これを祭り、寺を創建した(これが伊利天上寺のおこりである)。また、豪族・赤松円心のもった摩耶山城もこの寺を利用したものだとされている(最近、朽木史郎、橋川真一編著“ひょうごの城紀行 下”の中でこの摩耶山城についての詳しい解説が行われている。“のじぎく文庫,p.13-18,1998.執筆担当 角田 誠”)。この様に宗教的にもこの山に登ることは古くからあったわけで、明治のはじめの兵庫(神戸)での採集の場合、この布引とか摩耶山というのは既に調べに行っていたようである。

当時の神戸の状況は、“川崎の突端から生田までの海岸は見渡す限り一面の砂浜で、その中に布引から流れてくる小さな川があって海に注いでいた。当時の神戸は湊川にかかる橋の上から生田神社の参道まで続く曲がった細長い町で……”と説明されている(神戸外国人居留地、のじぎく文庫,1980)。

生田神社の周辺は野原で、冬の陽射しを受け荒涼としていた。背後には飯防山をはじめとする丘陵が連なり、木がこんもり茂っているのもあれば、地肌が露出している丘もあって、そのうしろから海拔2,500フィートの摩耶山が頂上を見せていた。布引の滝は雄大で美しく、芸術家が訪れるのにふさわしい小型のナイアガラだと。摩耶山の杉の大森林はレバノンの例の巨大なヒマラヤ杉よりこちらの杉の方が立派であるとはめ、摩耶山上の天上寺周辺の森にはたくさんのシカが生息していて、摩耶山と居留地のうちで日本でこれまで見たこともないような大きなシカを仕留めた。また、裏山ではサル群れが遊んでいたとも記している。

このように、摩耶山はわりと古くから街のすぐそばにありながら、人々の訪れる山でもあれば自然の残った山でもあった。

摩耶山の甲虫相はどの様であるのか、私も何回となく登山して採集しているが、まとめたことはない。戦前、摩耶山麓にある神戸一中(現神戸高校)博物学会から“一中附近の昆虫”と題する刊行物が出版されている。摩耶山を含む摩耶山西側斜面一帯から蝶類8科67種、甲虫が38科376種記録されている。

この摩耶山からは、摩耶山を原産地として記載された種が51種あり、摩耶山麓にある篠原、原田、大石、アイスロード、カスカード峡等とされているものが16種ある(これは私の所有文献で調べたもの

で、抜けているものがあるのではと思われる)。

摩耶山を原産地として比較的話題に出る甲虫としては、エグリゴミムシ、マヤサンオサムシ、ヤマトエンマコガネ、キョウトアオハナムグリ、チビマルヒゲナガハナノミ、ワダカミキリモドキ、マヤサンコブヤハズカミキリなどがある。

中でもヤマトエンマコガネが摩耶山麓に多産するといった記録がある(Waterhouse,1875)、実に面白い記録であり、現在とは全く違っていた環境のもとでは、たくさんいたのであろうと思われるが、この種は現在の日本でははっきりとした産地がわかっていない種で、世の移り変わりでないなくなってきた虫の代表的なものである。

戦前、摩耶山でオオチャイロハナムグリが採集されたとかされていないとか、話題になったコガネムシであるが、戦後の記録もあつたりする。おそらく摩耶山の前面の未開地には棲息していると考えられる。本種は県下では氷の山、扇の山方面ではわりと見られる種である。

摩耶山は神戸市内にある山だし、頂上まで歩いて登るのに適当なところということで、わりと採集に出掛けたものである。東隣の六甲山がどちらかといえば頂上等がやや早く遊園地のようなのであまり採集などには条件が良い場所ではなかった。六甲山の場合は頂上から紅葉谷を経て有馬へ下りる道とか、逆に神戸電鉄駅から六甲山の頂上に向かって行くとか、さらには六甲山の北背面地域の方が採集には面白いものがいたように思う(例えば逢山峡から六甲山山に行くなどは面白かった)。

どちらかといえば、摩耶山とか六甲山などは戦前とか終戦後すぐの頃には行くことが多かった山である。六甲山上にツヤスジコガネを多産していたり、八代池付近の樹に無数のヒゲナガビロウドコガネに出会ったことなど、印象に残っている。六甲山ホテルへ採集姿で昼食を食べに行ったら、上着を着用して下さい、なんならお貸しいたしましょうかといわれて面食らったり、仲秋の名月を見ようと六甲山ハウスのジンギスカン鍋を食べに行つてあまりの涼しさに早々に下山したこと、六甲山上に夏季出来るテント村に室井 緯博士と一泊夜間採集に行つた思い出(戦前)、結構採集には行つている山である(摩耶山の甲虫については私の報文を参照して頂きたい。鳥と自然 No.38:12-18,1986)。

(TAKAHASHI TOSHIO 神戸市兵庫区氷室町 1-44)

今年も越冬していたウラナミシジミ 広畑 政巳

本種は夏から秋にかけては兵庫県下でも普通に見られるが、春から夏にかけての最終目撃記録は報告されていない。本州における本種の越冬地は房総半島・三浦半島・紀伊半島の南端が知られており、そこで越冬した個体が世代を繰り返しながら北方へ分布を拡大すると言われている。夏から秋にかけて県下各地で見られる個体はどこで越冬し、どのように分布を拡大してきたのか今のところ判っていない。

淡路島における越冬の記録は 1979 年 2 月 11 日に淡路島の南淡町大川で、1985 年 1 月 13 日に南淡町土生と洲本市中津川で確認されている(広畑,1980,1987)。しかし、その後の分布の経過は調査をしていないので判明していない。

今年(1999 年) 1 月 24 日の南淡町大川の調査でエンドウより終令幼虫 2 頭を確認しているので報告しておく。いつも越冬後の分布調査をと思いながら、春から夏にかけての調査ができず、どのように分布が広がっていくのか興味あるところである。淡路島での春から夏にかけての分布の調査を期待するところでもあり、また採集記録をご教示いただければ幸いです。

<参考文献>

- (1) 広畑政巳(1980) 兵庫県南淡町に於けるウラナミシジミの越冬と温度について Parnassius (22): 1-4.
- (2) 広畑政巳(1987) ウラナミシジミの越冬について 蝶研フィールド 2(3):17-18.

(HIROHATA MASAMI 姫路市白鳥台 3-11-8)